

大洋州に浮かぶ“世界一幸せな国バヌアツ”での活動報告

因幡 智寿子

(18-1, バヌアツ共和国, 体育, 名古屋市立御幸山中学校)

失礼します。皆さん、こんにちは。私は2006年ちょうど赴任したときに、世界で一番幸せな国ということで、一躍日本でも脚光を浴びたバヌアツ共和国で活動をしていました。座らせて発表させていただきます。

自己紹介ですが、2006年3月まで名古屋市立の中学校で保健体育の教員として勤務した後、2年間協力隊の体育隊員として、バヌアツ共和国に派遣されました。去年の4月からまた同じ学校に戻って、現場復帰ということで、中学校の教員をしております。今回はバヌアツの紹介と自分の活動を中心にお話すると共に、キーワードであるバランスについてもときどき触れてお話させていただきたいと思います。

それでは、まずバヌアツってどんな国ということですが、バヌアツってどこにあるのということですね。ここに日本ですね。ここにオーストラリアがあって、ニュージーランドがあって、ここにニューカレドニアがあって、フィジーがあって、その間の国ですね、ここにある小さな点々がバヌアツです。バヌアツですが、83の島があって、だいたい寄せ集めても新潟県と同じくらいの面積にしかありません。人口はだいたい23万人くらいで、時差は日本より2時間早いです。宗教はキリスト教が多いです。そしてたくさんの宗派があります。歴史としては、1980年まではイギリスとフランスの統治国家だったのですが、1980年に独立したという国です。それに伴いまして、言葉ですが、英語とフランス語、それからビスラマ語、これは、現地人と開拓民がある程度コミュニケーションがとれるようにということで、英語をベースにした形の話し言葉です。この3つが一応、公用語になっていて、その他は、それぞれの各島、各村に100以上の独自の言語があります。これは、ちょっと複雑で私も分かりませんでした。ビスラマ語は、さっきも言いましたように英語に非常に似ています。こんにちはについてもハロー、そして、とっても日本人はビシュラマ語が上手だと褒められました。今日も私の同期のバヌアツの隊員と、一昨日バヌアツから帰ってきたばかりの隊員が2人いますので、ビスラマ語に興味があるならばそちらに聞いていただければありがたいのです。このスライドを見ると分かりますが、そのまま読めばいいんですね。ハローとか、さようなら、ルッキムユー、非常にわかりやすい、日本人にしゃべりやすい言葉だったので、英語を母国語とする人達より私たちの方が発音は良かったかなという風に思っています。バヌアツ人についてですが顔は怖いです。メラネシアン系の人は顔が怖いですね。ただ、必ず挨拶をする習慣があって、こちらが挨拶をして、ニコッとすれば、ニコッとしてくれて、いい笑顔になるのですが、いつもニコニコしている人はいません。普段の顔は怖いです。後は日本人に似ていてとてもシャイです。恥ずかしがり屋なんですけども、ただ突然大胆になったりしてびっくりすることが多々あったのですが、基本的にはとてもシャイですね。日本人に似ていて、思ったことをあまり表面だと言っていません。ということは、どういうことかということ、裏でなんか言ってるんだらうなということですが、これはやっぱりありましたね。

後は、ファミリーをとっても大切にして、大家族が多いです。ここの家族は4人家族だったのに、なぜこの人が？という知らない人がいきなりその家に住み込んでいたりというのはよくありました。まず、最初のバランス感覚、自分のすごく困ったところなんですけど、距離感の取り方ですね。彼らはとても優しく、困っていると必ずみんなが助けてくれるんですね。でも、最初のうちはあまりにも親切すぎて、何か後から要求されるんじゃないかという、毎回毎回疑心暗鬼の連続で、という風だったのですが、これは、取り越し苦労でした。ほんとに親切でした。後は、どこの国にもあると思うのですが、あんまり特定の人ばかりと仲良くしていると、周りの目が気になるということもありました。後半は、自分、色も黒くなったり、言葉も不自由しなくなってきたのでバヌアツ人に近づいたと自分は思っていて、さらに友達が遊びに来てくれたときにも黒くなりすぎて、私だということが最初分かってもらえなかったですね。それくらい黒くなっているからいいかなと思ったんですけど、でもやっぱりバヌアツの人からみれば、私はやっぱり日本人だということで、どれくらい日本人として、バヌアツの人と距離をとるのかということはずごく考えました。

バヌアツの特徴ですが、先程も言いましたが、たくさんの村があって、村単位でいろいろなことが行われていて、ファミリーや村、そういうのをとても大切にします。言葉がいろいろあるのも、たぶんコミュニティを大切にしてきた証拠だと思うのですが、もう一つ特徴的なのは、首長制度、チーフ制が残っています。この人がある島のチーフなんですけど、こういうチーフがいて、かなりの力を持っています。田舎に行けば行くほどこういうのはまだまだ顕著にあります。チーフが村をまとめていて、警察が介入しないときもありますね。私がいたときですが、バヌアツの刑務所は土日は帰宅 OK、平日は外出 OK、その辺に買い物にいけない、さらに時々、脱出、脱走する事件があったんですけど、結局みんなまとめて帰ってくる、そういうこともありました。

次、バヌアツの伝統と文化ですが、私は女性ですので、女の人の、これアイランドドレス、たぶん周り大洋州の国にはどこにでもあると思うのですが、こういったドレスが主で、こうやってお母さんたちこんな風に着て生活をしていきました。ただ、私は体育隊員でしたので、スポーツをするのにはあまり適さないということと、私のキャラクターとしてあんまりスカートを履くということがなかったので、ほとんど着ませんでした。現地の人達はこういう入り込む生活を喜んでくれるということで、隊員でアイランドドレスを着て授業をしている人もたくさんいました。ただ、現地の人たちはスポーツするときにアイランドドレス着てたりとか、海に入るときもアイランドドレスもまま入ってたりとか、ということがあって、服で着替えてスポーツするということが無く、そういう習慣がなかったので、どこまでそれを着替えたほうがいいよということを強要して、どこまで私たちの一般論を伝えていったらいいのかというところは指導の場面ですごく考えるところでした。こういった、普段は T シャツに半パンとかいう感じなんですけれども、お祭りや儀式になると、こうやって島によって、これは私の教え子ですが、こういった服装をします。島によって、全く服装が違いますね。全くといってもあまり変わらないですけど。こんな感じで、これ全部草で作ってますので、エコですね、非常に。時によっては、お母さんたちは上半身なにも付けていないとか、これは今のバンジージャンプの元になったというランドダイビングのときの島の人の格好

ですが、こういう格好をしたり、彼らは誇りを持ってやっていますね。普段、Tシャツと半パンでも、こういうときになると、自分たちの村の踊りが踊れたり、歌が歌えたりということが出来るんですよね。親から子、子から孫へという風で、日本で失われつつあるそういう伝統が今もきちんと残っているのだなと感じました。

バヌアツの食べ物ですが、基本はイモとバナナ、ご飯にインスタントラーメン、炭水化物ばかりですね。こういったものもあるのですが、基本的には、内容物が同じ、形が変わっただけ、イモをすってココナッツで煮るとか、イモをすって蒸して食べるとか、これは、今日来ている同期の石澤くんが作ったやつ写真をもらったものです。本当に中南米の人の話を聞くと、料理の手間が一手間も二手間も違って、こっちの国の人は何て食に対してあまり意欲がないということを感じましたね。同じ味のものを食べていることが多かったですね。マーケットに行ってもやっぱりイモばかりですよ。たぶん、大洋州の方々は同じではないかと思うのですが、バナナだったり、イモの種類がいくつもあったりという風にですね。バヌアツナンバーワンのマーケット、イモばかりではなくて、時期的に野菜が出てきます。だから、食べるものには困らなかったかなあという感じですね。時々こんなものも食べますということで、これは何かというと、コウモリですね。フルーツコウモリです。

次、バヌアツの自然ですが、これは首都のポートビラです。町が小さいです。首都でもこんなに綺麗な感じですね。後は美しい山や海があったり、ブルーホール、これは時々テレビに出てきたりしますが。後は、世界で一番近くまで行ける火山があったりとか、とにかく自然しかないそういう国ですね。

ちょっと本題に入り、バヌアツの教育事情なのですが、学校は月曜日から金曜日で、毎朝7時半から始まります。1教科大体90分なので、小学生は、持つわけないですね。途中で勝手にトイレに出かけていきます。巡回で授業しているときに、他の学年の子が突然入って来ていたりとか、1回は、小学校1年生の授業に幼稚園児が入り込んでいたりとかいうこともありました。90分はとても持たないですが、これは一般的な授業の形態になっています。バヌアツ、私が赴任したところ2006年から、6年間の義務教育が8年になりました。だから、小学校に6年生までだったのが8年生まで、実は、バヌアツにはセカンダリースクールとかカレッジという上の学校があって、ここにも7年生が存在していて、小学校にも7年生がある、こういうセカンダリースクールやカレッジにも7年生があるという風にいろいろごちゃごちゃ混じったことがありました。どうなるのかなと思ったら、将来的には、小学校は8年生まで、セカンダリースクールやカレッジは9年生からにするという風になるというところまでは聞いて帰ってきました。義務教育とはいうものの、学校それぞれちょっと値段は違って、授業料を払わなければならなかったもので、続けられないという子もいて、さらに踏み倒して来ている子もいるという状況でした。

私の活動報告ということで、私は教員養成大学で教師の卵を教えるというのが要請内容だったので、まずは体育の教え方を教える、保健分野の知識を教える、大学の体育の指導シラバスの作成、体育の隊員として巡回で小学生に体育の授業をする、JOCVの保健体育部会の隊員としてワークショップをする、日本文化の紹介、原爆展の開催、それから、大学のプロジェクトに参加ということで、5つ大きな柱として仕事をしてきました。まず、先生の卵に

体育の教え方を教える、単元の選び方、授業の進め方、それから、彼らもやっぱりスポーツ大会なんかを開いていかなければならないので、ナショナルルールがどんなルールなのか教えるという形で、審判の仕方を教えたりというのをやっていました。保健分野ですが、彼らは卒業後どんなへき地に行かされるか分からない、薬や病院不足、そういうのが問題になるので、ひどくなる前に応急措置なんかをきっちりおこなっておけば、死に至るところまで行かずに済むということもあるのではないかと考えて、日本赤十字社や現地の NGO をお願いをして、資料の提供をしてもらいながら、授業をしました。

ここで、保健分野どこまで教えればということなんです。応急処置を中心に保健分野を教えたんですが、いつも日本で私も中学校で教えていますので、教えるときに「ここからは病院に行きなさいよ」、「ここまでやったら病院に行きましょう」と教えているところが、ここでは病院が無いのでどこまで教えていけばよいのかというのがすごく迷いました。日本では常識だけどバヌアツでは非常識、病院がないからっていうところでこれはちょっとやっぱり迷いましたね。私、初代の隊員でしたので、子どもに教えるシラバスはあるけれども、教員をつくるシラバス、体育のシラバスは大学にありませんでした。どうしようかってことで自分なりに考えて保健体育について考えるときに安全や健康面を考えた体育を教える教員としての知識、それからあとは体育の知識、子どもの成長に見あった運動に関する知識、健康に関する知識、ただ、他の教科とかぶらない、ということで考えて、外枠だけ作って任期が終了しました。あとは小学生に教えに行ったりもしました。10 年以上、体育隊員が派遣されて体育の普及を進めているのになかなか定着しない、その 1 つの原因としては先生自体が体育を習っていない世代なので体育の楽しさや必要性があまりわかっていないということが考えられます。だったら必要性を教えるために、生活と健康を密着させて体育の大切さを伝えては、スポーツの大切さを伝えてはどうかということで、保健関係の隊員と協力をして保健体育部会を設立しました。その公衆衛生と体育、健康と運動の関係について話をするために、保健関係の隊員と協力をしてコラボレーションワークショップをしました。例えば、午前中は私たちが生徒を対象に体育の公開授業をして、午後からは教員を対象にこの公衆衛生の指導をする。そういうようなワークショップをやったりもしました。ここでまたバランス感覚の話なんですけど、どのくらいの割合で力を入れればということなんです。赴任して最初は体育隊員は私一人だったのですが、そのあと体育隊員たちが増えてきて、保健体育部会を立ち上げたりとかというふうになってきたときに、今まで 100% 任地の仕事をしていればよかったものが、これが少しずつ変わっていくんですね。両方とも一生懸命頑張りたいのだけでも自分の体は一つであり、なかなか時間も足りないということで、どっちにどれくらい比率をかけていいのかなっていうことをやっぱり自分の中でちょっと迷ったところでした。

あとは日本の文化を伝えるということで、ジャパンウィークも開催しました。これについては自己満足ではいけないなと思って事前に実行委員を募集して、このスライドを見て頂けるとわかるんですが、バヌアツ人がバヌアツ人に着物の着付けをしています。事前に一緒に勉強をして、バヌアツの人にも日本の紹介をしてもらえるようにという形でジャパンウィークを開催しました。またバランス感覚ですが、原爆展やジャパンウィークなんかの催し物を行なった時に、いろんな質問を、日本の質問をされても答えられなかったんですね自

分は。というか自分の国のこと、日本のこと何にもわかってないなっていうのをすごく痛感して、世界に出て行く前に自分の国のことを知らなさ過ぎる、自分はどうなんだろうとか、ちょっと日本人として恥ずかしくないかなっていうことをすごく思いました。

最後にですが、大学のプロジェクトに参加もさせてもらいました。先日バヌアツで初めて世界遺産に登録された伝説のチーフのお墓がある島に、ここは普段入れないんですが、そこにある自然のものを生かして弓矢を作り、それで魚を取ってコンテストするというプロジェクト、自分たちの伝統を残していこうっていうプロジェクトに参加をさせて頂きました。私のリラックス法です。バヌアツは海しかないですのでダイビングの免許とって潜ったり、これはですねシュノーケルのレベルですね、ダイビングで潜らなくてもこれくらいの海が見えました。あとはジュゴンがいたり亀がいたり、時々亀につかまって泳いでみたり、そんなことをして。で、先輩たちが残していったボディーボードとかサーフボードとかできました。本当に限られたところなんですけど、そこで時々海に入ってリラックス、気分転換をしていました。それからカヴァ、これはですね大洋州独特の飲み物だと思うんですが、コショウ科の根っこをミンチする機械に入れて水でしぼって飲む、非常に不味い飲み物なんですけど、これを飲むとリラックスできるんです、絶対でもないですけどね。で、カヴァを飲むところをナカマルと言って、社交場にもなっています。これ大統領なんですけど、大統領にカヴァを奢ってもらったということもありました。いってみれば居酒屋に麻生首相が来て、一杯奢ってもらいたいなそういうような感じですが、そんなことも経験してきました。

帰ってきてからですが、中学校の総合学習でこの活動についての話をさせてもらったり、公衆衛生、保健関係のこともちょっと携わったので、広島の赤十字大学や自分の出身の大学のほうで講義をさせてもらったり、会報誌なんかに記事を載せさせてもらったり、卒業生、国際関係の学部に通っている生徒の論文に協力したりと、自分が出来る限りのことで少し協力をさせてもらっています。今後の予定では、他の学年でまた総合学習だとかそういうのがやれたらいいなと思いますし、ほか、また自分の経験を伝えられる機会があればいいなというふうに考えています。

活動全体を通して、大変だったことはやっぱり生活環境が違う、コミュニケーション、言葉の壁、あとはずっと通して言いましたがバランスですね。心と体、日本人として、他人との距離、色々な場面で自分のバランス感覚が試されたというふうに思っています。良かったことですが、短気だった自分が色んなことを気長に待てるようになりました。それから幸せのバロメーターが自分の中でできたということです。幸せは物ではないということはよく頭の中ではわかっていたんですが、この二年間で自分の腑に落ちたかなって思います。あとはこんな私でも二年間海外で活動が出来たということで、自信が持てるようになったかなというふうに考えています。自分がやった活動は今すぐ結果が出るものではなくて、10年、20年先に繋がっていったところで答えが出たらいいんじゃないかなっていうふうに考えています。ご清聴ありがとうございました。